

ハイスクール ドラゴン オブ 八幡

時月闇

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

昔からイジメを受けていた比企谷八幡。家族にも暴力を振るわれ家から追い出されてしまった。そこから始まる比企谷八幡のストーリー

タグ増えました！あと超駄文です！

目次

プロローグ	1
0章 八幡の居場所	
1話 強さの意味	9
二話 仲間の存在	18
休日の日の出来事1	25
休日の日の出来事2	32
八幡が去って考える者達	40
襲来前編	44
襲来中編	51
襲来後編	56

プロローグ

俺は昔イジメにあっていた。小学生の時目が腐っているからという理由でイジメにあった。毎日暴力を振るわれ、ランドセルから筆箱を出しその中の物をそこら辺に捨て鉛筆は目の前でおられた。そんな事が毎日のようにやられていた。

家に帰れば妹が出迎えてくれた。俺は殴られたアザを隠し妹にバレないようにし部屋に行く。

行こうとすると妹が「お兄ちゃん無視しないで！」と腕を掴む。俺は無理やりそれを振りほどいた。妹はその場で転び泣いてしまった。すると親がかけ寄り、「大丈夫か小町?」「怪我はない?」と小町を心配した。

すると俺に向かって「このバカ息子!小町になにをした!」親父は俺に暴力を振るってきた。母親からは叩かれ、小町は泣いている。

親父は俺に「小町を何回泣かせやがる!もう、うちから出て行け!」と家から放り出された。

俺はまだ小学四年生であり、ここからどうやって生きろって言うんだよと思いつながら歩いていった。

神社に着き神社の前に座っていると後ろから声がした。

「ねえ君大丈夫そのアザ?」

「大丈夫じゃないかな」

「少し待ってて!」

少女は神社に向かって走っていった。

それから数分すると少女が戻ってきた。

「少し動かないでね」

少女はバンソウコウを持ってきて俺に貼ってくれた。

「もう大丈夫ね!」

「ありがとう」

「いいの。で、君名前は？」

少女は名前を聞いてきた。

俺は家から追い出されたから苗字はいらないよな

「八幡、ただの八幡だ」

「そう八幡ね！私は朱乃、姫島朱乃よろしくね八幡！」

朱乃ははにかんだ笑顔でそういう。

「八幡はなんでここにきたの？」

「ここからだど夕暮れが綺麗に見えるからきたんだ」

「そうなんだー、私も好きだよここからの夕暮れの景色」

「そうか」

「うん、せっかくだから遊ぼう八幡！」

「いいよ」

そこから八幡と朱乃は夕暮れまで遊んだ。

「またね八幡」

「またな朱乃」

そう言つて俺は神社から公園に向かった。

それから公園に行きベンチに座って考えていた。

さてこれからどうすればいいか。このまま死のうかな俺は屑みた
いだし。

考えているとまた声がかかる。

「あのーすいません、迷ってしまっただんですけど道わかります？」

そこには髪の毛が赤い少女がいた。

俺は、今日よく女の人に声かけられるな。

「えっと、そこはこうしてそこを右に曲がれば着きますよ」

「ありがとうー！これで迷わず行けるわ」

「そうですか、なら俺はここで」

「待って、せめて名前でも聞かせてもらえないかしら」

「八幡だ」

「私はリアスよ、よろしくね八幡」

リアスは目的地に向かって走っていった。

俺はどこか迷惑にならない場所で死のうと町を歩いていた。

やっぱり山の方がいいのかな

八幡は山に向かい歩いていった。

山に向かうにはさつき朱乃と遊んだ神社を通らなければならなかった。

八幡は神社の石段を登り頂上に着くと、神社は燃えていた。

周りには黒い羽を生やした人間が取り囲むようになり、真ん中には朱乃がいた。

朱乃は服がぼろぼろになっており泣いていた。

「こいつが殲滅対象ですか、隊長」

「ああ、資料に書いてあった人間と堕天使のハーフの子だ」

「そうすかそれなら、おいそのガキせめて痛みのないように殺してやるよ」

堕天使は手から光状の槍を出しそれを朱乃に向けた。

俺は体が勝手に動いていた。

「やめろおとおお」

俺は朱乃をお姫様だっこで走り抜け石段の近くまで走った。

「八幡！」

「ああ」

「お母さんがアイツらにころされたの！」

「そうか、それは災難だったな」

朱乃は泣いており八幡は頭を撫でてやった。

「なにしてくれてんの人間？俺らの邪魔してんじやねえよ！」

堕天使はその場から動き八幡を蹴り飛ばした。

「お前はそこで待ってろ、アイツを殺してお前も殺してやるよ」

堕天使は俺に近づいてきた。

まだ小4の俺は立ち上がれずにいた。

堕天使は光の槍を出し俺の手に刺した。

痛みに絶叫する。

朱乃は泣いて「殺すなら私を、彼は関係ない！だからやめて！」と

墮天使にすがりつく。

墮天使は朱乃を蹴り飛ばし朱乃は気絶した。

俺は手に二つ足の裏二つに光の槍が刺さっていた。

「俺っちの邪魔をしたんだ痛がって死んでもらわなきゃな！」

墮天使は俺の心臓を目掛けて槍を刺そうとした。

あ、俺は死ぬのか。

まだ少ししか生きてないのになー

『お前はそこで死ぬのか』

死んでもいいと思う

『彼女はどうする』

朱乃を助けたいけど動けないから

『諦めるのか』

諦めたくない

『ならなにを望む』

俺は欲しい、誰にも負けない力、誰かを守れる力が欲しい！

『ならば汝に力を与えよう！吼えよ！そして我が名を世界に轟かせよ！』

『我は黄金帝王神龍！ゴールドエンペラードラゴン！』

5

八幡は黄金の鎧に身を包み光の槍を止める。

「こいつ神器もちか！」

堕天使は槍を倍に増やしそれを投げつける。

八幡は躲して相手の懐に潜り込み蹴りを打ち込む。

堕天使は倒れ、周りの堕天使も光の槍を出し八幡に投げつける

「エンチャント　　マキシマムブラスト」

八幡はスピードとパワーを上げ堕天使を一網打尽にする。

「ありえね！俺らは墮天使のなかでは幹部だぞ！こんな人間ごときに！」

隊長と思われる墮天使が光の槍を出し

「人間風情が調子にのるなー！」

光のヤリのでかさは倍加し八幡に投げつける

『ハウリング』

八幡は雄叫びを上げると光のヤリは消えていった

「何故だ、たかが咆哮ぐらいで俺の技が」

「朱乃に当たったらどうするんだよ teme エ。次で殺してやるよ」

『エンチャント マキシマムブーストダイバイディング』

『エンペラーラストスラッシュ！』

八幡は墮天使を切り裂き倒した。

八幡は朱乃の方に向かった

朱乃は気絶から目覚め八幡の戦いを見ていた。

「大丈夫か朱乃？」

八幡は朱乃の頭を撫でながら問う

「うん、大丈夫少し痛むけど八幡すごいね！」

「俺にもわからん、でも朱乃を守りたいと思っただけなんだ」

「守りたい……」

「おう！」

やばいすごい恥ずかしい

『相棒そろそろ悪魔が来ちまう逃げるぞ』

『え、なんで』

『アイツらとは少しな……行くぞ』

『え、ちよつとま、！』

八幡は空に飛んで行く

『待つて八幡！まだお礼が』

「悪い朱乃、俺は行かなくちやいけないみだから、次は会えるかどうかわからないけど、また遊ぼうな！」

「うん！絶対だよ約束！」

八幡は空に向かい飛んで行った。

『すまないな相棒』

『いいよ、まずいやつらなんだろう？』

『ああ、俺がこうなってるのを知れたらまずいからな』

『そうか、これからどうするか』

『相棒は強くなりたいたいだろ？』

『ああ、誰かを守れる力が欲しい』

『なら冥府の森に行くぞそこは強い奴らばっかいるから修行にはなるはずだ』

『わかった冥府の森に向かおう』

朱乃SIDE

今日の前には赤い髪の少女がいた

「ねえ、あなた私の眷属にならない？」

何を言っているのかわからなかった

「ごめんなさい突然すぎたわね私はリアス・グレモリーあなたが姫島

朱乃よね」

「はいそうですけど」

「私たちは悪魔なのそして私はあなたを眷属にしたいと思ったの」

「眷属？それはどういう」

「眷属になれば生きられるわ長くね」

長く生きられれば八幡にまた会えるかもなら

「わかりました、私は眷属になります！」

「嬉しいわ朱乃！私のことはリアスと呼んでちょうだい？同い年のよ
うだし」

「わかったわリアス」

「ええ、これからもよろしくね朱乃」

私はそこからリアスの眷属であり女王の駒になった
待つてるわこの街で早く来てね八幡！

八幡SIDE

冥府の森に行くためにはこの門を通らなければならぬみたいだ。

正直こんな門を通って異世界に行くのは少し憧れていた。ラノベ
を読んでたら誰しも思うよね？

『そろそろ行くぞ相棒』

『ああ！』

八幡は門に向かい歩いて行った

門を抜けるとそこは樹海が広がっていた。

0章八幡の居場所 1話強さの意味

なんかここザ樹海だな。富士の樹海みたいだ。

『相棒そろそろ修行と行くぞ』

え、まじ、いきなり

『早く強くなりたいだろ?』

まあそうだけど、しょうがねえやるか!

『良しまずは、腕立て100回だ』

いきなりハードなんですけど

『これでも序の口だぞ』

まじですか

『大真面目だ』

はあ、やめていい?

『辞めてもいいがまたあの二の舞になるぞ』

それはやだな、良しめんどくさいがやるか!

そこから八幡は腕立て100回をやり

『次腹筋100回だ!』

死ぬ、まじ死ぬ、少し休ませてくれよ

『休んでしまったら、身体が硬くなるから無理だ』

そんなあー

八幡は渋々腹筋100回をやり終えた。

『よくやったな次は、と思ったが少し休憩だ』

やっと休める。

そのまま前に倒れ込み地面に突っ伏していた

それから数分がたち

『次は力の使い方だ』

おー、それで何をやればいいんだ?

『北に少し歩け、強い奴がいる』

強い奴?

森の中を北に進み少し開けた場所に着く

そこには、顔はライオン体はヤギ尻尾は蛇の魔物がいた
いやあれ完全にキメラやないですか

『相棒あれを倒して夜の飯にするぞ』

いや無理だつていかにも強そうじゃん

『強い相手ほど燃えるだろ?』

お前はどこぞの戦闘狂かよ

『ドラゴンは大抵そういう奴ばかりだぞ』

まじ、まあやりますか腹も減つて来てるし

八幡は禁手を使いキメラに戦いを挑みに行った

それから数時間後ようやく倒せた

『お疲れさん相棒』

まじで死ぬかと思った

もうやりたくない

『まあいいじゃねえか、勝てたんだから』

そういうもんじゃない

なんだよ魔法使つてくるとか聞いてねえよ

『あれは俺でも想定外だった』

おい!

『まあそれはいいとして、そのキメラ食べるぞ』

それから太陽は沈み月が出ていた

なあ、お前さんの名前まだ聞いてなかったな

『俺の名か、そうだなバハムート。そう呼ばれていた』

バハムートて呼びづらいな

『ならアダ名でも考えるか?』

そうだなじゃあムートで

『ムートかいいいアダ名だ』

そういえばムートはどうして悪魔にバレるとまずいの?

『俺は昔二天龍の喧嘩を止めた時があったんだ、

その時の悪魔、堕天使、そして天使たちがその二天龍封印神器にし

たんだ。その時俺もされそうになってだな、そこから逃れられて自分の巢に戻ったんだ。その巢は本当は何もしてないのに罪を着せられた悪魔や、墮天使を匿うところでもあったんだ。今この状態なのは封印されたからではなく自ら志願して神器になった。罪を着せられた悪魔や墮天使が俺の巢にいることはあいつらも知っている、けど近づけないように俺がいるってわけだ。もしこの姿がバレたら奴らは必ず俺の巢を攻め込み罪を着せられた者たちを殺すだろう。だから俺がこの姿をバレたくなかったのはそういう理由だ』

ならなぜ志願して神器になったんだ？

『ある時俺の巢に老人が現れてな、

老人が神器になってもらいたい、なんか言い出すんだ。俺は拒否をした。当たり前だろ？守る奴が居なくなつてはここは攻められる、でも老人は契約を持ち込んできた。匿っている奴には病弱な奴や、怪我をした奴、そして食糧難があつてそれを全部解消してくれると言う。最初は嘘だと思つた、だけど老人は病弱の奴を治し怪我をした奴も治してくれた。それから食料は老人からもらった種で木は1日で育ち果実がなり、他の種は米や野菜などが1日で育つた。俺は老人に感謝として神器になった』

話を聞くにムートは優しいんだな

『困つた奴は見過ごせないからな。相棒と同じだな』

俺は自己満足のためにやってるだけだ

『捻デレか』

捻デレじゃねえ

『そうか、そろそろ寝るぞ朝はランニングだ』

ひえーまじかよ

そこから八幡はそれらを続け5年という年月が過ぎた

その間にはちゃんと中学にも行き勉強をし部活にも入った。

まあ強制だったんだけどな

そこでは雪ノ下や由比ヶ浜と一緒に『奉仕部』をやったりもした。

でも中学三年の時の修学旅行で由比ヶ浜や雪ノ下の関係が崩壊した

『貴方のやり方嫌いだわ!』

『もっと人の気持ちも考えてよ!』

やっと本物が見つかったと思った。
でも違った。俺は二人から拒絶された。

学校では噂が広がり学校に居づらくなった。

そこから俺は学校に行くのをやめた。

冥府の森に行ったりムートの巣にも行った

ムートの巣に居た人たちは俺が現れたことに戸惑っていた。

でも俺を迎えてくれた。俺が過去を話したら泣いてくれた人も居た。

俺がやっと見つけた本物の居場所

そこからムートの巣を拠点にして新たな組織を作った。

その組織は、困っている者を拒まず優しく歓迎し弱い者を強い者から

守るのがこの組織の方針である。

組織の名は『アヴァロン』

意味は絶望した人、死にたいと願った者たちが楽しく生きていける
楽園の場所である事を願って付けた名前である

八幡SIDE

「これで良し!」

『何を作っているんだ相棒』

これはな悪魔たちが使っている悪魔の駒みたいな奴だよ

『何故作ったんだ?』

俺が居ない時があつても誰かここを守らなければならない。そのために作ったんだ

『で、性能はどうなんだ?』

性能は、悪魔の駒のクイーンの方がこっちの駒はポーンと変わらな
いんだ

『てことは、悪魔の駒でいうとクイーンが沢山居るわけか』

その通りだ

『これはたまげたものを作ったな相棒』

そうか妙に器用だからな

『それもそうか』

あとはこれを誰に付けるかだな

『それは後でよくないか』

それもそうだな少しランニングするか

『そうだな俺は少し寝る力を使うときは起こせよ』

了解

八幡はムートの巣から出て樹海を走っていると

「あのはぐれ悪魔どこ行きやがった」

「賞金は俺様のものだぜー!」

「おいどうしたんだお前ら」

八幡は悪魔に問う

「あ、なんだよしらねえのか?今こら辺にSS犯罪者のはぐれ悪魔
がいるんだ。大分弱ってるみたいだから殺しに来てるんだ」

「そうか、頑張れよ」

「おうよ!」

会話をした悪魔は樹海の奥深くに走って行った。

「おい、出てこいよはぐれ悪魔さん」

「何故私がここにいることがわかったにやん」

「気配かな?」

「そうかい、あんたも私を殺しに来たんだろう」

「そんなわけねえだろ」

「悪魔はもう信じない嘘ばかりつきやがるにやん」

「そうかもな」

「殺さないなら私は逃げるにゃん」

「そうか。んじゃあな」

「このことは恩に着るにゃん」

黒い和風の服を着た彼女は樹海の奥深くに逃げて行った。

これは付いていった方がいいな

八幡は気配を消し彼女を追いかけていった。

それから数分して木の上から彼女を見ているときっきの悪魔たちに見つかってしまい囲い込まれていた。

「おい！いたぞ！はぐれ悪魔だ」

「女だったのかこいつは上玉だな」

「俺たちが遊んでから殺してもいいすよね」

「ふぎけるにゃ！お前達になんか捕まるもんか！」

「もう魔力も切れて何もできねえだろ？」

「せめて俺たちに遊ばれて死ねや」

そういうと男の悪魔達は彼女に詰め寄って着た。

「誰か、誰か、助けてにゃん！」

「誰も来るわけねえだろ」

それを見ていた八幡は、大声で

「お前は生きたいか！なんのために生きたい？」

「なんだこの声？」

男の悪魔は周りを探す

「妹を守りたい！だからまだ生きたい！」

彼女は必死に叫んだ

「ならお前は何を我に捧げる！」

やばいすごく恥ずかしいけど、言っただけで見たかったんだよなー

「私の全てを捧げるにゃん！だから妹を守る力が欲しい！」

「よかろうならこれを胸に当てて願え」

八幡が投げたのはクイーンの駒だった

受け取った彼女はそれを胸に当て願った。

駒は光だし胸の中に入っていた。

「さてそろそろお出ましと行きますか」

木の上から降り彼女の前に降りる

「なんやさっきのあんちゃんじゃねえか」

「そいつを匿ったら痛い目見るぜ」

「俺たちは悪魔の中で強い方だぜ」

と男悪魔達は言うが八幡は

「それがどうした」

男悪魔達を否定した。

「なら、死ね！」

「奴らは相当強いにやんだから早く逃げて」

「無理だ。困っている人を見過ごすのはうちの方針に合わないでね」

八幡は歩き出し

行くぞムート！

『あいよ、相棒』

『バランスブレイカー！』

そこからは悲惨だった。

八幡が相手を圧倒し男悪魔たちは八幡に傷一つつけられず倒れた。

彼女は思った

彼カッコいいにやん。こんな私を守ってくれた。こんな私を、

彼女は助けられたことに泣いてしまった

「あー大丈夫か？」

八幡は彼女の頭に手を置きヨシヨシ撫でた

「にゃーん／＼／＼」

彼女は嬉しそうに泣いた

それから八幡は彼女を自分の組織に連れていった。

「すまなかった！」

「もういいにやん助けてくれたことだし」

「いや俺が早く助けていれば」

「助かったわけだしそれはいいにやん。それより私を助けてくれてあ

りがとうにやん」

「いや、こちらの自己満足ためだ」

「捻デレにやん」

「おいこら！」

「それより私に渡した駒はあれ悪魔の駒よね？」

「悪魔の駒ではなく名付けるのなら、

『龍帝の駒』

だ。」

「龍帝の駒？」

「性能はうちの方が何倍も上だぞ」

「でも私は悪魔の駒があるはずにやん！」

「俺の駒はそれを上書きをするから平気だ」

「そうかにやん、それより私をどうするかにやん」

彼女は恥じらいながら体に手を当てる

「あれはいつて見たかったただだから気にするな」

「私の恥じらいを返してにやん！」

「それも兼ねて謝っただろ」

「それで私をどうするかにやん」

「そうだった、君の名前は？」

「黒歌だにやん」

「俺は八幡だ。それでなんだが俺たちの組織に入って欲しい」

八幡は頭を下げた。

「いいにやん」

「え、いいの？」

「うん！ここはいいにやん。堕天使と悪魔が笑いながら生きてるにやん。こんな楽園はここ以外ないと思ったからにやん」

「そうか、ありがとう。そしてようこそ『アヴァロン』へ」

黒歌と八幡は手を出し握手をする

「あと一つだけいいにやん」

「なんだ？」

「私八幡に惚れたにやん！」

「なあ！／＼／＼」

「照れてるにやん」

「照れてない！」

赤くなってる八幡に黒歌はキスをした

「必ずハートを射抜くから待ってるにやん！」

私は必ず八幡を落として見せるにやん！

黒歌はそう決心したのだった。

『よかったな相棒』

うるせえ！

二話仲間の存在

「黒歌の部屋はここの先にあるところだから」
「わかったにやん！」

今八幡が黒歌の住む部屋を案内をして居るところである
「食堂は一階にあるから。分からない事はあるか黒歌？」

「この巢からでちやダメかにやん？」

「どうしてだ？」

「妹を探したいのにやん」

「その気持ちはわかるが少し待ってくれないか？」

「わかったにやん。八幡の言う事だから待つにやん」

「ありがとう黒歌」

八幡は手を黒歌の頭に乗せ撫でる

「八幡のこれは最高にやん」

「あとで仲間の紹介もするから7時くらいには食堂に来てくれ」

「わかったにやん！」

黒歌は廊下を走って行き自分の部屋を見つけその部屋の中に入っ
ていった。

『相棒少し話がある』

「うわ！なんだよびっくりした」

『龍帝の駒を誰に与えるか決めたのか？』

ある程度は目星はつけてある

『そうかならいつ渡す？』

黒歌の紹介がてら食堂で渡すよ

『わかった。俺は寝るから飯の時は起こしてくれ』
了解

ムートとの会話を終えて一人廊下を歩いていった。

八幡は食堂に向かい冷蔵庫を開けると

「マッ缶がないじゃねえか」

はあー、買いに行きますかな千葉まで

そう呟き千葉までマッ缶を買いに行く八幡であった。

玄関に着きスリッパを脱ぎ靴を履き外に出る

今は総武高校の近くまで来た八幡は

「中学の時はこの高校狙ってたな」

まあ、今は関係ないけどね

八幡はそのまま通り過ぎ近くのスーパーに立ち寄った

このスーパーはマッ缶が他より安いんだよな

スーパーの前に立ち扉を開けスーパーの中に入って行く

マッ缶、マッ缶、お！安売りされてるラツキー

マッ缶を取ろうとすると他の手に当たった

「あ、すいません」

「いえ、こちらこそ」

そこにはアホ毛が目立つ黒髪の少女がいた

「これお好きなんですか？」

少女が八幡に問う

「まあ、好きだよマッ缶。君は？」

「私はあまり好きではないです」

「ならなんで買うの？」

「昔出て行った兄ちゃんが好きだったので」

「なんかごめんな、変な事を聞いて」

「いえ私は大丈夫です！」

「小町早く行くわよー」

「はぁーい。ではさよなら」

小町は母親に呼ばれそちらの方に小走りで行った。

ごめんな小町。兄ちゃんはお前に会う事は出来ないんだ

八幡は心の中で謝り

「マッ缶ーダース買って行くか！」

マッ缶のダースを持ちレジに向かって行った

マッ缶ーダースを持ち家に帰ろうとするとそこには捨てられた猫

がいた

「お前は一人か」

「ニャアアン」

手を差し出して撫でようとすると猫が指を舐めてきた

「しようがねえ、来るか？」

「ニャアアン！」

猫は元気よく鳴き八幡はそれを頭に寄せ帰っていた。

黒歌SIDE

「フニャアアン」

黒歌はあくびをしベットに横たわっていた

あれから八幡と別れて部屋の中でゴロゴロと日向ぼっこをして
いた

「眠たくなってきたにやん。7時まで時間あるから寝てるかにやん」

黒歌はそのまま寝た。

～時刻夜7時～

八幡SIDE

八幡達は食堂に集まっていた。

「よし飯はできてるな食べようと思ったが黒歌がいないな」

黒歌何してるんだ。早く飯を食べたいから起こしてこよう

「レム、ラム、二人で黒歌を起こしてきてくれないか？」

八幡は二人の少女を呼び黒歌を起こすように指示をする

「ラムはめんどうくさいから可愛い妹のレムが起こしに行ってくれ
わ」

ピンク色の髪の少女が言う

「姉様、八幡君が二人で起こしてきてくれと言っているのです行きま
すよ」

水色の髪の少女が言う

「わかったわ、レムの可愛さに免じて行ってあげる」

レムとラムは階段に向かい黒歌の部屋を目指して歩いていった

「八幡！私はお腹が空きました！早く食べさせてください」

「相変わらず食いしん坊だなアルトリア」

「お腹が空いては戦はできぬ、ですよ八幡」

今会話をしているのはかつてアーサー王と呼ばれた英雄アルトリア・ペンドラゴンである。

「少し待つんだアルトリア、食いしん坊だから食べたいのはわかるが」
「シロウもそう言うですね！私は食いしん坊ではありません！」

今アルトリアに注意をしたのはかつて錬鉄の守護神とも言われた英雄エミヤシロウである。

「この所の話、アルトリアとエミヤは両想いである

「ねえ、八幡今日またまたマツ缶買ってきたの？」

「あれは俺のソウルドリンクだ！」

「あれ飲み過ぎると糖尿病になるから1日一本ね」

「えー、それはないよレイン」

「八幡を心配して言ってるんだよ」

「わかった、ありがとうな俺を心配してくれて」

「当たり前でしょ！八幡が病気にかかったら私嫌だもん」

俺を心配してくれるのはレインと言う赤色の髪の少女である

それから数分して黒歌がレムに連れられ食堂に来た

「飯を食べる前に聞いて欲しいことがある！新しい家族を紹介しよう」

「はぐれ悪魔だった黒歌だ。皆んな仲良くしてやれよ」

八幡は黒歌が家族になった事を食堂にいる全員に言う

「はじめまして、黒歌ですにゃんこれからよろしくにゃん！」

周りからは

「よろしく〜」

と黒歌を歓迎した

「あとまずこれの事を説明するから食べながら聞いてくれ」

八幡は龍帝の駒を前に出し駒の説明をする

「この駒はここを守る奴に渡すから今から発表する」

『王』

八幡

『女王』

黒歌

『僧侶』

レム

ラム

『戦車』

ロウリイマーキユリー

夜架

『騎士』

アルトリア

エミヤシロウ

『兵士』

リユーズ

リヴァイ

時崎狂三

沖田総司

司波達也

でいく。呼ばれたものはあとで駒を取りに来てくれ」

「はーい（了解だ）（わかりました）」

「レインは俺のサポートを頼む」

「うん！レインちゃんにお任せあれ！」

駒を発表し夜ご飯を食べるか

八幡は夜ご飯を食べる

それから数分

「八幡妾も戦いたいぞ！」

八幡の前で腕を組み少し怒り気味の藍原延株がいた

「そうよ！イリヤも戦いたい！」

もう一人エンジユの隣にいるイリヤスフィールが言う

「悪いな二人とも危ないから家で待つててくれないか？」

と八幡は両手を二人の頭に置き頭を撫でる

「しようがないな八幡は分かった！妾は待つてる」

「しようがないわね八幡は。まあお姉さんに家は任せないさい！」

エンジユは頷きイリヤは胸を張った

「おー、家の事は頼んだぞ二人とも」

エンジユとイリヤは二人一緒に走って言った

夜ご飯を食べ終わり呼ばれた人達は八幡の近くに集まり駒を受け取った。

「皆んな頼んだぞここを守るため力を貸して欲しい」

黒歌は、

「任せるにゃん」

レムとラムは、

「任せて（ください）」

ロウリイは、

「任せていいわよ」

夜架は、

「お任せを主様」

エミヤは、

「ふ、任せるがいい」

アルトリアは、

「ええ、任せてください。アルトリアの名にかけて」

リユーズは、

「八幡様の為に付き従います」

リヴァイは

「任せろ」

狂三は、

「了解しましたわ八幡さん」

沖田は、

「沖田さんにお任せあれ！」

達也は、

「任せてくれ八幡」

皆んな了承してくれた

それから皆んな解散し自分の部屋に戻っていった。

それから八幡とレインは話をしていた。

「私は八幡のサポート役かー」

「悪かった」

「もういいよそれでそちらの猫さんは？」

レインが指差したのはさつき拾ってきた猫である

「さつきマツ缶を買って帰ってる時捨てられていたんだ」

「今でも捨てる人いるんだね許せない」

「まあ、そう言うわけだから」

「それで名前は決まったの？」

「『カマクラ』にしようと思う」

「いい名前ね」

「そうだろ」

「私そろそろお風呂入ってくるね」

「おう！わかった、ゆっくりしてこいよ」

「もう、分かってるよー」

レインは自分の部屋に着替えを取りに行き風呂場に行った。

「よおし。カマクラ部屋に行くぞ」

「ニャアアン」

カマクラは八幡の足から登りお気に入り頭の upper に乗り

「おし出発！」

カマクラと八幡は階段を登り自分の部屋に戻っていった。

そのあと皆んなが寝静まった後黒歌と夜架が夜這いしに来たが追
い返した八幡であった。

休日の日の出来事1

俺は自分の部屋でマツ缶を片手にラノベを読んで居た。

「今回も面白かったなこれ」

読み終わったラノベを机の上に置きマツ缶を飲み干す。

ここから暇だな。まだ朝の10時だと言うのにとても暇だ。

『暇なのか相棒』

ああ、暇だから寝ようかなて

『それは構わないが筋トレも忘れるなよ』

了解

八幡はベットに横たわり寝ようとするすると食堂の方で喋り声が出た。

なんだ、喧嘩か？

食堂での喋り声が気になり食堂に向かう

く食堂く

「私が八幡をデートに誘うの！」

「わたくしが八幡さんをデートに誘いますわ」

「主様は私がデートに誘いますわ」

「八幡君はこのレムが誘います」

「八幡様は私とデートに行きます」

えーと、なんだこれ

八幡は食堂に着き混乱している

近くにいたラムに話を聞く

「なんであんなに騒いでるのラム？」

「ハマチを誰がデートに誘うか揉めているだけよ」

「ハマチでなんだよ」

「あなた以外に誰がいるのかしらハマチ」

なんだよそのあだ名。まあヒキガエルよりはましか

ラムと会話をしていると

「二八幡（様）（君）（さん）（主様）二」

「うお！驚いた」

「誰とデートに行きたいですか？」

「ひとまず、皆んな落ち着け」

八幡は皆を落ち着かせ話をする

「えーとまず、話はラムから聞いた。デートは交互にやればいいんじゃないか？」

「その手があった！」

え、何気づかなかったの皆んな

そこから八幡は今日はレイン、明日は狂三、明後日は夜架、明々後日はレム、その次がリユーズとデート日が決まった。

皆んなは1番最初になれなかったの悔しんでいた。

「あれ、黒歌は？後エミヤとかセイバーも」

八幡は疑問に思い、レインに尋ねる

「エミヤ君とセイバーちゃんはデートに行ったよ。あの二人はラブラブね」

あの二人は相思相愛なのは知っているがなんかムカつく

「了解、黒歌は？」

「黒歌ちゃんはお買い物だって」

「わかった、ならレインそろそろデートの準備をしようか」

「うん！／＼／」

八幡とレインは食堂で別れそれらの部屋に行く。

そこから数分が立ち二人は玄関の前で待ち合わせていた。

「少し早かったか」

腕時計を見てレインを待つ。

「お待たせー」

とレインが小走りで八幡のもとに向かう。

「はあー、お待たせ。待たせたかな？」

「いやそんなに待ってない」

「そこは、『今来たところだ』て言うだよ」

「なんかごめん」

「気にしなくていいよ。行こう！」

「ああ！」

レインの手を引かれ玄関の外に出る。

そこから数分たちムートの巢からでて東京の渋谷に来ていた。

「すごいね〜八幡あそこのお店に行こう!」

「おおい!」

レインに連れられユニシロに入って行く。

「これがいいかなー、それともこっち?」

レインは今絶賛悩んでいる

片手に持っているよのは赤を基調にした服、もう片方は白と水色を基調にした服を持ち悩んでいた。

「ねえ、八幡どっちがいいかな?」

「どっちでもいいんじゃないか」

「もう〜試着室で着替えるからその時感想言ってね」

「へいへい」

レインは試着室に走って行く。

そこから数分が立ちまはすは赤を基調とした服を着て来た。

「どうかな／＼／＼」

「結構似合ってるな」

「そうかな／＼／＼」

「ああ」

なんとというかレインの可憐さが出ていて今の可愛さから少し大人びている感じでいいな。うっかり告るまでである」

「告白／＼／＼」

レインは急にゆでダコのようになった。

「どうした?」

「ううんなんでもない／＼／＼」

そう言っってまた試着室に戻って行く

『今のワザとか相棒』

なんのことだ?」

『まあいつものことか』

なんだよそれ

ムートと心の中で会話をしていると

「どうかな／＼／＼」

試着が終わったレインは八幡に尋ねる

周りの人は

「やば、かわいすぎだろ」

「女神やー」

「今から告白してこようかな」

「彼女の目の前でなに言ってんだ！」

「イター！」

周りの人は大絶賛した。

レインは少し照れつつ八幡再度尋ねる

「どうかな／＼／＼」

「えっと、なんだ可愛いぞ／＼／＼」

「ありがとう／＼／＼」

今のレインはさっきの大人びた感じではなく素の可愛さがかなり引き立っていた。これは嫁にしたいまでである

「嫁にしたいだなんて／＼／＼」

レインは手を顔に抑え恥じらいを隠しながらレジに向かった。

ユニシロで買い物を終え次のお店に行き昼飯のため近くのお店に入る。少し古風を感じられる店に入り注文をする。

「私はこのサンドイッチとコーヒード」

「俺もそれで」

二人は注文を終え少し話していた。

「八幡と二人きりになるのは久しぶりだね」

「そうだな」

「八幡は忙しいから仕方ないんだけどね」

「ごめんな」

「ううん謝らないで」

「そうか昔か〜」

レインは昔、普通の家庭であった。その家族は誰しもが思う幸せな家庭だった。レインには一人の妹がいた。妹は、いわゆる天才で今では博士までやっている。レインは大人達に妹とと比較をされて結構

苦しかった。最初は妹が天才である事を喜んだ、親も喜んでいた。でもそれはいつの日か終わりを迎えた。妹があまりにも出来が良く妹ばかり構っていた。レインはそっちのけで妹を可愛がり、テレビや取材でもらったギャラを全て妹のために使った。家では一人で飯を食べ、料理は一人で作っていた。学校でも辛かった。学校の先生もレインを比較し放置した。女子からイジメを受けていてもスルーされ見えて見ぬふりを先生達がしていた。レインは嫌気が立ち家から出て行った。そこで誘拐にあった。その時助けたのが八幡であった。八幡はレインを助け家を出ていった訳を聞き、アヴァロンに招待した。レインは最初アヴァロンに着いた時は一人だった。でも八幡はレインに構い続けた。八幡は自分の過去を話しレインと打ち解けた。そこからレインは明るくなり今ではラムとレムの先輩メイドをやっている。

「昔は嫌だったけど今はとても幸せだよ。ありがとうね八幡。私をアヴァロンに連れてきてくれて」

「礼には及ばないよ」

話していると昼飯が来た。

昼飯を食べ終わりデザートを再開する。

色々な店を周りあつという間に夕方になった。

「最後に寄りたい所があるけどいい?」

「どこだ?」

「ハン」

そこは普通のショッピングモールだった。

「なんで最後にここによつたんだ?」

「裁縫の糸が切れちゃてたから買いに来たの」

「最近寒いもんなー」

「皆んなの分を編んでるんだよ」

「それはすごいな」

「楽しみに待っててね」

「おう」

レインと二階に登りゲームショップの前を通ろうとしたら人だか

りがてきていた。

「なんだろうねこの人だから」

「さあ？」

「まあいいか、行こう八幡」

「了解」

ゲームショップを通り抜け用とした時少し中から喚き声が聞こえた。

「お兄ちゃんゲーム買って！モンハン最新作買ってよお兄ちゃん！」

「こないだ買っただろうまる！」

「前のは違うもん」

「知らないよ」

「だから買ってよお兄ちゃん！」

「わかったから泣き止んでくれ。周りの人の目が痛い」

「ありがとうお兄ちゃん！」

「これで最後だからなうまる」

「うんわかった！」

そこから八幡とレインは裁縫の糸を買いショッピングモールを出た。

誰もいない道を通り転移した。

家の前に着き庭を歩いていると

「今日はありがとうね八幡」

「喜んでもらえれば幸いだ」

「ふふ、また行こうねデート」

「おう！楽しみにしてるからな」

二人は玄関の前に立ち一緒にドアを開けた。

「エミヤ、セイバーとどこいったんだ？」

「何、ただの食歩歩きだ。そっちこそどこにいったんだ八幡」

「デートだよ」

「そうか随分楽しかったみたいだな」

「まあな」

「では、俺は夕食の準備をしてくる」

「おう、いつもありがとうな」

「礼には及ばんさ」

エミヤはそのまま厨房に行った。

休日の日の出来事2

10月31日朝9時

「八幡さん遅れてすいませんわ」

「遅れたって10秒だぞ」

「ぴったりじゃないとだめなんですの!」

今俺達がいるのは秋葉原、通称アキバである。この間はレインとデートだったので今日は狂三である。

いや周りの目線が痛いまじで。狂三の服かな?ゴスロリだし

「八幡さん行きますわよ」

「わかったから、走らないでくれ」

狂三は八幡の腕を持ち引つ張りながらアキバに向かう。

アキバに着き周りを見渡す。今日はハロウィンなのか仮装してる人ばかりいる。店もハロウインの柄になっていた。狂三は周りを見渡しながら歩いている。

「どうでしょう?」

狂三は何かを考えているご様子。俺はどこでもいいんだけどね狂三といれば。

「ここにしますわ!八幡さん行きますわよ」

狂三に連れられてきたのは猫カフェである。猫カフェの中に入り狂三は猫じやらしを持ち、

「ほれ、それ、うまいですわね」

猫じやらしを奇妙なに動かし猫と戯れる。俺はそれを見つつコーヒーを飲む。

「まだまだ行きますわよ」

狂三はなんと、猫じやらしを手に三本つつ持ち六匹の猫と戯れる。何あれ、すごい!後で教えてもらおう。

疲れてきたのか一旦こちらに戻ってくる。

「楽しいですわ!八幡さんも楽しくて?」

「ああ、楽しいよ」

「そうですか!なら選んだかがありましたわ」

そう言つて狂三はまた猫と戯れる、次は9匹になっていた。あんた
どんだげ猫のあやしがり上手いんだよ。

猫カフェで時間を潰していたらもう昼の1時になっていた。最終
的に猫を20匹もあやしがっていた。他のお客さんがいなかったから
いものの20匹は凄すぎないか狂三さん

猫カフェから出てまた街に戻る少し小腹がすいてきたので普通の
カフェに入る。

「猫と戯れていると心が落ち着きますわ〜」

「そうかそれは良かったな。で、これからどうする？」

「この間調べておいたゴスロリのお店に行きますわ」

「そこに行くんだな了解」

目的も決まり、カフェでケーキを頼む。

「こうやって八幡さんとデートするのもいいですわね」

狂三はコーヒーを口に持っていき呟いた。

「昔は戦つてばかりでしたから」

「昔と今は全然違うな」

「八幡さんもそうですわよ。昔と今全然違いますもの」

「昔は色々あったからなー」

「まあ、私は今の八幡さんも好きですわよ／＼／＼」

「ありがとうな狂三」

狂三は昔天使と呼ばれていたらしく、今俺達と戦っている天使とは
違う。昔は人間であったが、今は『刻々帝』という能力を持っている。
初めて会った時なんかは、急に攻撃してきたんだもんなー。影から無
数の狂三達が出てきたのは正直驚いた。

そのあと話し合いでわかった事があった。自分にこの力を与えた
ものを殺すと、今は力を探していると言っていた。だから俺は自分
にも手伝わせてくれないかと言った。最初は断られた。自分の事は自
分でやると言われ初めて会った時はそれでいなくなった。そこから
何回も説得した。

ある時は銃を突きつけられて「目障りですわよ八幡さん」なんて言
われた。俺は狂三にある交渉を持ちかけた。力を与えるからこつち

の要望にも答えて欲しいと。最初は乗る気ではなかった狂三は、渋々俺の交渉の話を聴いてくれた。まず、アヴァロンに連れていきアヴァロンの現状を話した。狂三は最初は驚いた。

それから「力をくれるってなんですか?」と聞かれ俺ははなした。自分の中にいるムートの力の中に一時的に力を他人に渡せるという能力。これで俺は狂三と一緒に戦えるし、狂三も力が手に入る。力の事は承諾してくれた。

ここからは要望はなんですか?と聞かれた。アヴァロンに入ってくれと俺は言った。その時のアヴァロンは守るものが少なく困っていた。だから狂三をアヴァロンに誘った。狂三はそれを承諾してくれてアヴァロンに入った。で今に至るわけです。

「お待ちどうさまで。チョコケーキにショートケーキでございます」

店員さんが、ケーキを持ってきた。

「食べるか狂三」

「はいですわ」

俺がチョコケーキで狂三かショートケーキである。

俺がショートケーキだと思った?残念、チョコケーキでした

二人とも食べ終わり街を再び歩く。狂三の言っていたゴスロリショップに向かう。着いて見ると、少し入りづらかった。見た目からしてハロウィンではなくなんか凄く派手だった。店の中に入り狂三は目を輝かせながら見渡す。そこには見覚えの人もいた。

「何やってるんだロウリイ」

「あら八幡あなたこそどうして?」

「狂三とデートでここに来た」

「そうなのまあいいわまた今度私もデートしてもらおうからね」

「わかった」

「なら、また後でね」

ロウリイは持っていた服をレジに持って行った。

「どうしましたの?八幡さん」

「いやなんでもない。で、どれにするんだ」

「まずは試着してきますわ」

狂三は二つの服を持ち着替えに行った。

一つは白を基調にした服。もう一つは黒を基調にした服だった。どちらがいいかと言われてもどっちとも可愛いと言ったら、照れながら試着室に戻っていった。試着が終わり最終的には二つ買うことにした。店から出て街を歩き人だかりの多い場所に着く。

「なんですのこの人だかりわ?」

「さあな」

狂三と俺は少し高い場所に移動し車が通る大通りを見る。そこは車が走っておらず何かのライブでかきりだった。歌っていたのは9人の女の子だった。ハロウィンの仮装をして歌っているようだ。歌が終わり大きな拍手と喝采が巻き起こる。

「皆さん!『μ, s』のライブに来てくれてありがとうございます!」

どうやらμ, sというグループだったみたいだ。

「いい曲だったな」

「ええ、そうですね」

「そろそろ行こうか」

「分かりましたわ」

狂三と俺は街にまた戻っていく。

そこからは食べ歩きをしたりして、夕暮れになり少しデカイ公園にいた。

「今日は楽しかったな」

「ええ、そうですね」

「また行くか?」

「私は構いませんわ」

「わかった、次は俺が誘うよ」

二人で夕暮れどきに公園で歩きながらはなしていると狂三が、

「八幡さん堕天使の気配がしますわ」

さっきまで笑っていた顔が変わった。

「場所はわかるか?」

「あそこの森ですわ」

「わかった」

二人は走り森に向かう。

??? SIDE

「こいつね、特殊な神器を待つ子って」

「はい」

「なら抜き取るわよ」

「了解！」

男の墮天使が少女に詰め寄る

「元は天使だったから情けとして痛くないように殺してやる！」

「やだよ、誰か助けて、、、」

と少女が言うと、

「助けてやるから捕まれ！」

少女の目の前に現れた八幡は少女を抱き狂三の方に向かう。

「狂三、頼む！」

「任されましたわ、おいでなさいザフキエル！」

狂三が叫ぶと時計が現れる。

「ザイン！『7の弾』」

時計から煙のようなものが出て狂三の持つ銃に入って行く。

「八幡さん、彼らを喰ってもよろしくて？」

「いいぞ狂三」

「許可も出ましたわけですし、きひひひ喰らいますわよ私たち！」

狂三は銃を墮天使に構え影から無数の狂三が現れる。狂三は銃を放つと食らった墮天使は止まった。そこから無数の狂三たちが周りに集まり墮天使に銃を放つ。あれ食らった時はマジで死ぬかと思っ
た。

「なんだよあれ！」と周りの墮天使が暴れ出す。

「落ち着きなさい！」

墮天使のリーダー的存在が現れる

「無茶ですレイナー様」

「無理ではないわ、あれを食らわなければいいことよ」

レイナーレは翼を羽ばたかせ狂三に突っ込んで行く。

「おバカな墮天使さんたちですわ」

無数の狂三達はレイナーレに向けて銃を放つが、レイナーレはかわして行く。

「私には無駄だ!」

「ならこれでどうですの。アレフ『一の弾』」

狂三は自分にアレフを撃ち動きの速度を上げる。

「バカな! そんな私が」

レイナーレは狂三の弾で右肩を撃たれた。

「きひひひひ、私に勝てるのは八幡さんだけですのよ」

狂三は笑いながらレイナーレを見下ろす

そのあとは残った男の墮天使達を狂三が喰らった。そして最後にレイナーレが残った。

「狂三、少しは回復したか?」

「おかげさまで回復しましたわ」

「そうか、おいそのレイナーレといったな。この子をどうして狙った。」

「言うか、人間ごときに私が」

「そうかなら、狂三いいぞ」

「分かりましたわ」

狂三は自分の影にレイナーレを取り込もうとすると、一瞬の不意を突かれ空に羽ばたいて逃げてしまった。

「逃げられてしまいましたわ」

「しようがないこの子を連れて帰るか」

「そうですわね」

気絶している少女を抱えアヴァロンに戻る。

アヴァロンに着き空いている部屋に寝かせ、起きるのを待っていた。目を覚ました少女は周りを見渡し、

「助けてくれてありがとうございます」

「気にしないでくれ、助けたかったから助けたんだ」

「それでもありがたいとございます、親の仇をとってくれて」

「それはどういう事だ？」

「私の家は花屋をやっていました。普通の家族で営んでいました。でも今日急にあの人達が家を襲撃してきたんです。私を庇って親は死んでしまいました。逃げてたら捕まってあそこにいたと言うわけです」

「そうか辛いことを聞いたな。すまん」

「もう大丈夫です。私の名前は渋谷凧でございます」

「俺は八幡だ」

そこからは八幡は今この世の中で起きていることを話した。墮天使や悪魔そして天使がいること。自分達はそれらに対立するもの。説明を終えると渋谷凧は、

「私はこれからどうしよう」

「ここにいといるといいよ」

「でも、迷惑わかけたくないです」

「ここは困った人達を救う場所なんだ。だから気にすることはないよ」

「分かりました。ありがとうございます八幡さん」

「敬語はよしてくれ、これでも同い年だから」

「なら、わかったよ八幡」

「おう、それでいい。困ったことはここにいるやつに聞いてくれ」

「うん、わかったよ八幡」

そう言い部屋の外に出る。

ムート少しいいか

『なんだ相棒？』

渋谷凧の神器の能力が分かるか

『あれは変わった神器だな』

どんな能力だ？

『歌を歌うと仲間の潜在能力が上がる奴だ』

なら、シルヴィアと一緒だな

『そうだな気をつけろよ。変わった神器だから狙ってくる奴らは沢山

いるからな』

わかってるよ。なら新しい駒を使うかな

『新しい駒?』

名付けて、『歌姫の駒』だよ

『それはまた大層なものを作ったな』

シルヴィアのために作ってただけど二個作つといてよかった

『もはやチェスの駒ではないな』

なんでもありなのが、『龍帝の駒』だよ

『そうか』

ムートの会話を終え食堂に向かう

八幡が去って考える者達

八幡が学校に来なくなりある者達は考えていた。

く平塚静SIDEく

比企谷が来なくなつて数ヶ月私は自分の部屋でタバコを吸いながら酒を飲んでた。比企谷が来なくなつた後に私が比企谷に行なつてた暴力がバレてしまった。そのおかげでその中学から辞めてもらいたいと言われた。正直比企谷は私の事をバラさないと思つてた。いつも目が腐つていて、捻くれていたりしていた。私は比企谷を思つて『奉仕部』に入れた。それが間違えだつたとは今でも思つていない。だから、

「比企谷、次会つた時は私をこんな目に合わせた事を後悔させてやる」
テレビを見ながら酒を飲んでそう呟く。そこから見えたのは平塚静の背中から生えた悪魔の翼だつた。

く由比ヶ浜SIDEく

ヒツキーが居なくなつて数ヶ月私は落ち込んでいる。一年生の時の犬のサブレーを助けてくれた時はヒツキーに恋をしたんだと思う。でもね、修学旅行の時のあれはひどいよヒツキー。だから私はその時ヒツキーに恋をしているのは間違つていると思つた。あの告白は私の好意をわかつててやつたんだよね？

「ヒツキー、次会つた時は私の料理を食べさせてあげる」

由比ヶ浜の背中からは邪気と悪魔の翼が生えていた。

く雪ノ下雪乃SIDEく

比企谷君が居なくなつて数ヶ月、奉仕部は無くなつてしまった。あそこは私が好きだった場所であつて由比ヶ浜さんと話したりするのがとても楽しかつた。でも顧問の平塚先生の暴力事件で部は廃部になり、そのあと誰かから「葉山と雪ノ下は付き合つてる」という情報

が校内で出回った。私は否定したのだけれどそこから私はまたいじめにあった。靴は隠されて、椅子には画鋲が置いてあったり、わざと弁当を落とされたりした。これも全部ヒキガエルのせいよ！彼が居なくなつてからこんなことが起きた。

「比企谷君貴方は私の逆鱗に触れたわね」

雪ノ下雪乃は復讐心と悪魔の翼が背中から生えていた。

〈葉山SIDE〉

俺はいま一人屋上にいる。比企谷が居なくなつてから数ヶ月。色んな事があつた。雪乃ちゃんと付き合つていてという噂に。最初は少し嬉しかった。ずっと好きだつた雪乃ちゃんと付き合つていてという噂が。これを本当の事にしよう、雪乃ちゃんと相談した。でも雪乃ちゃんは、「それは無理だわ、私達は付き合つてもないのだから」と言われた。少し残念だつたがある一つの答えにたどり着いた。あの時無理と言われた、それは思い人がいるという事。それは恐らく比企谷だ。彼が学校から去つてから雪乃ちゃんはいつも考えたりしたりしていた。でも最近雪乃ちゃんがいじめにあつていて事を知つた。俺は知つて居たが見ぬフリをした。比企谷、君だつたら多分自分に敵意を向けて雪乃ちゃんを救うだろ。俺には無理だ。俺は皆んなの葉山でいなければならなかつたから。でも、比企谷何故逃げたんだ。比企谷がいじめにあつたのは最初から知つていた。君が逃げたから雪乃ちゃんはいじめにあつたんだ。

「雪乃ちゃんを悲しませた比企谷。僕は君を許さないからな」

葉山からはドス黒いオーラと悪魔の翼が見えていた。

〈材木座義輝SIDE〉

我が盟友が消えてから数ヶ月たつ。八幡よどこに居るのだ。体育のペアが居なくて我寂しいぞ。八幡が消えて学校は変わった。ある者は「比企谷だっけあいつ転校したらしいぜWW」「逃げだ笑笑」と言つた言葉が聞こえてくる。最近雪ノ下嬢が怖い。あと由比ヶ浜嬢も。我のラノベは誰が読んでくれるんだ。八幡よ我は八幡がいじめ

にあるのは知っていた。我は弱いだから巻き込まれたくないと思っ
た。でも友が消えてから分かった事があった。心が苦しくはち切れ
そうなんだ。我は友を助けられなかった。だから次会ったら謝りた
い、そして我も共に悪の奴らと戦おう。いじめは怖い、友のため
だったら我は一肌いや何度でも脱いでやる！

「我が友八幡よ、我は八幡の味方であるぞ」

彼の背中からは正義のオーラが宿っていた。

く戸塚彩加SIDEく

八幡が居なくなつてから数ヶ月僕は変わらない日常を送っている。
勉強を受け放課後はテニスをしたりしている。でも八幡が居なく
なつてから楽しい日常が楽しく感じられなくなった。八幡がいじめ
にあつて居たのを知ったのは八幡が居なくなつてから分かった。前
にアザだらけだった八幡に大丈夫で聞いたら「大丈夫だ、戸塚を見た
らケガなんて治る」と言った。あの時気付いていれば良かった。八幡
に僕は謝りたい。何もできなくてごめんねと。今は会えないけど願
う事ならできる。だからこの教会で、

「八幡がいじめられず平和に過ごせますように」といつも願っている
よ八幡。

戸塚は教会で祈り捧げて居た。彼の背中からは天使の翼が生えて
居た。

く雪ノ下陽乃SIDEく

彼が消えてから数ヶ月、私は怒っている。私は悪魔で、爵位も最近
もらえた。怒っている理由は、雪乃ちゃんがいじめにあつている事。
彼が消えてから雪乃ちゃんはいじめにあいだした。君がそう仕向け
たんでしよう？お姉さん言ったよね、雪乃ちゃんを傷つける奴は容赦
しないで。だからこの『悪魔の駒』で、比企谷君を兵士にして沢山
いたぶつてあげる。今は静ちゃんと雪乃ちゃんと由比ヶ浜ちゃんと隼
人が悪魔になつてるんだよ。皆んな君に復讐するためにね。でも雪

ノ下の力を使っても君は見つからない。まあいいや、まだ全然生きられるしその間に探せばいいか。だからね、

「お姉さんはおこだからね？比企谷君」

彼女の笑みは笑っていなかった。

く川崎沙希SIDEく

あいつがいなくなった後、クラスがかわった。由比ヶ浜や葉山から比企谷の事を聞くとドス黒いオーラがでてくる。私もけーちゃんもあんたを心配してる。この間戸塚に比企谷に書いて話した。戸塚は謝りたいと言っていた。どうしてと聞いたら、彼はいじめにあつていたことが分かった。ち、そんなクソみたいな事をする奴てまだいるんだね。戸塚は一緒に教会で祈り捧げてくれないと言われて私は頷いた。それから毎日に教会であんたのこと祈ってるからね。届かなかったらぶっ飛ばすから、私の初恋、比企谷八幡。

「彼、八幡が気づきませんように」

川崎は朝いつも教会で八幡の安否を気にしながら手を合わせ祈り捧げている。そして彼女を見たものは誰しもが女神に見えたという。

八幡は、復讐心を燃やすもの心配してるものを知らずに日常を過ごしている。

襲来前編

「起きて八幡！」

レインに叩き起こされ目覚める。

「どうした、レイン」

「ここに、墮天使と悪魔と天使達が攻め込むという情報がはいつたの
！」

それを聞いた八幡は、

「皆を食堂に集めてくれ」

八幡は皆を食堂に集めろとレインにいい、自分は服を着る。

皆んなが食堂に集まり八幡も食堂に着く。

「皆んな落ち着いて聞いてほしい。これから奴らが攻め込んでくる」

それを聞いた者達は、涙を流したり、怒ったりしたものもいる。

「俺が渡した駒を持つものは残ってもらいたい。他はレムとラムが案内する隠し通路で逃げ、二つ目の隠れ家に待機してもらいたい。それでは解散」

皆んなは、食べ物や、お気に入りのオモチャとか色々持ちレムとラムに続いて裏口から逃げる。

「レム、ラム任せた！」

「了解！（です）」

戦えないもの達はレムとラムに続いて逃げていった。残った者たちは100人ぐらい残った。

「皆んなすまない、これからの戦いは死んでしまう可能性が高い。勿論俺たちはピンチの時には助けに行く。だからこの『アヴァロン』の為に戦ってくれないか？」

残った者達は、

「俺たちの楽園を潰させる訳にはいかない！」

「俺たちはここで救われただから命を落としてでも戦い抜き愛する家族のもとに帰る！」

「やってやる！」

残った者達は声を上げ戦いの準備に入る。

「これからは班で別れる、一班のリーダーは狂三、二班のリーダーエミヤとアルトリア、三班のリーダーはリユーズ、四班は主に回復に専念してほしい。四班のリーダーはシルヴィア、五班のリーダーは俺とレイン、六班はリヴァイにやって貰う、皆んな頼んだ！」

リーダー達は、

「了解(だ)(ですわ)！」

そこから数分後、作戦会議を行った。狂三の班とエミヤ班で先陣を切り、中間は俺とリユーズで担当し、後衛主に回復班はシルヴィアとリヴァイが着く。会議が終わりリーダー達は、準備に取り掛かる。八幡は後衛の回復班の中にいる洩凜に話しをしていた。

「悪いな、本来は逃げて貰う側だったのに」

「いいよ、私は皆んなのためになりたいからね」

「そこで頼みがある」

「何？」

「後衛で歌ってもらえないか？」

「なんで!？」

八幡は洩凜の中にある神器の話をする。話し終わると洩凜は、

「わかった、皆んなの為に歌うよ」

「ありがとう、でも戦場で歌えるか？」

「シルヴィアさんと何回も歌の練習をしてたから大丈夫」

「ならよかった、俺はそろそろ行くじゃあな洩凜」

「死ぬんじゃないよ」

「わかってる」

八幡は自分の班に戻る最中シルヴィアに話しかける。

「シルヴィア、洩凜の事頼む」

「任せて八君！」

シルヴィアは胸を張る

シルヴィアと別れ自分の班に戻り、詳しい説明をする。説明を終え、皆んな持ち場に向かう。

ここで守らないと、後の人達が危ない。俺たちでなんとかしないと『相棒、そんなに気を詰めるな』

でも、ここはみんなの楽園だ！だから俺たちがやらないと

『分かってる。相棒、俺たちに勝てる奴なんかいやしないだろ？』

ああ、ムートといれば勝てるな

『そうだ、その意気だ』

ありがとうなムート

八幡はムートと話を終え戦場に赴く。

〈悪魔SIDE〉

悪魔の頭領らしき赤髪の男性が悪魔と天使と墮天使の前に立ち、

「今日はアヴァロンとの全面戦争だ！無論勝ちに行く！奴らは我々のルールを破り我々に敵対するものである！勝てば我々の未来は平和で安泰である！皆の衆、力を合わせ奴らを倒すぞ！」

悪魔や天使、墮天使達は「おおー!!」と歓声があがる！

赤髪の男性は転移を使い城に戻る。自分の部屋にいるリアスと話しをする。

「悪いなりアス、俺は戦場に行かなければいけない」

「お兄様はお強いです！必ず勝つと信じています！」

「ありがとうリアス。ここで見ていてくれ」

「サーゼクス様お時間がそろそろ」

「ああ、わかった」

サーゼクスは転移を使い戦場に戻っていった。

〈リアスSIDE〉

私は今、みんなと一緒にいる。子猫や、朱乃、木場、アーシア、それとイツセイがいる。皆んな戦争の話で持ちきりであった。ソーナ達はまた違う部屋で戦争の様子を見ている。その中イツセイが、

「この戦争どうなるんです部長？」

「私にも分からないわ」

「そうですか、部長相手はどの位強いのですか？」

「結構強いわ。我々の陣営は千人ぐらいの人数で攻めこむけど勝てる

かは五分五分ね」

「ドライグは、わかるか？」

『悪いな相棒俺にも分からない』

「ドライグも分からないか」

イツセーは疑問に思いながらソファアに座る。アーシアが隣に座ってきて、

「千人もいるんです、負けるはずがありません！」

「やっぱそうか」

とアーシアがイツセーに言う。とその隣から朱乃が、

「分かりませんわよ、イツセー君。相手の大将はとても強いと聞いております。だから一筋縄ではいかないと思いますわ」

アーシアの意見を否定するかのように話す朱乃。

「木場だったらどう思う？」

「僕にも分からない、実際に見て見ない限りじゃあ判断出来ないよ」

「そうかー、子猫ちゃんはどう思う？」

「私は勝つと思います」

「皆んな別れてるんだな」

とイツセーは周りに勝つかどうか聞き頭を傾げる。

「話は後よ。始まるみたいね」

リアスはイツセーを止め前にあるモニターで戦争の中継を見る。

〜八幡SIDE〜

配置に付いて数分狂三から連絡が入った。

『わたくし達は攻め込みに行きますわ、援護任せましたわよ八幡さん』

「わかった」

狂三との連絡を終え後ろにいる班の人達に、

「俺たちは勝つ必ず勝つ！だから守ろうぜこの楽園を！」

班の皆が「おおー!!」と喝采を上げ、

「いくぞー!!」

八幡達は悪魔達の軍勢に向かって飛んでいく。八幡は「バランスブ

レイカー」となり戦場を駆けていく。前の姿と代わり龍の姿は黄金に輝きを放ち、その外見を見れば誰しもが慄き戦意を喪失させるかの様な威厳を放っていた。

八幡は戦場で悪魔達を倒していく。悪魔達は魔法や武器を使い八幡に攻めて行くが八幡の相手にならず次々と倒されていく。

あまり強くないな、これならまだいける。

力とスピードを上げ敵をどんどん倒していく。ある墮天使に殴ろうとした瞬間投げ飛ばされた。

こいつ凄く強いな！

八幡はその墮天使を睨みつける。

「そんなに睨みつけるな、俺の名はアザゼル。その神器、お前さんが大将だな」

「それだったらどうする」

「倒すまでだ！その神器にも興味あるからな」

アザゼルは手に持つ道具で、一瞬にして鎧を纏った。

なんだよあれ

『あれは偽物の神器だ相棒』

そうか、てつきり本物かと

『ドラゴンに似ているが違う、でも気をつけろよ。そいつ墮天使の総督だ』

まじか、でもやるしかないな

『そうだな相棒』

そこから八幡とアザゼルの戦いが始まる。

く朱乃SIDEく

私はあの金の龍を纏った人物を知っている。私を助けてくれた八幡だ。私が探していた人がようやく見つかったと思ったけど彼は敵の方にいた。私は彼の味方であると心の中ですつと決めていた。でも、私は悪魔でこっちの陣営である。リアスには感謝している。私を悪魔にしてくれたこと。そしてあの時に手を差し伸べてくれた事に。でもずっと好きだった彼の敵にはなりたくない。私は考えた。今す

ぐ八幡の方に行き八幡達を助けるか、それともここに残りこちらの陣営にいるか。

朱乃が悩んでいるのを見かけてリアスは、

「どうしたの朱乃?」

朱乃を気遣い肩に手を置く

「ごめんなさい、リアス」

「どうしたの、朱乃?急に」

「私行かなきゃ」

「待ちなさい!どこに行くの!」

リアスは朱乃を止めようとするが止められるず立ち尽くしていた。

朱乃は部屋を飛び出し走り去る。

ごめんなさいリアス私は、八幡のところに行くわ!

朱乃は外に出て八幡達のいる戦場に向かう。

「どうしたんですかね、朱乃さん」

イツセーがリアスに問う

「分からないわでも、嫌な予感がする」

リアスはまたソファアに座りモニターを見る。すると子猫ちゃん
が、

「部長、朱乃さんが金の龍を助けています!」

リアスは驚きモニターを見る。そこには朱乃が金の龍を助けてい
る姿だった。

く八幡SIDEく

アザゼルと戦って数分が経とうとしている。正直今ピンチである。
アザゼルが思うほど以上に強く、「どうした、金の龍帝!」とそう言っ
た瞬間地面に殴り飛ばされる。八幡は血を吐き倒れる。アザゼルは
「俺もそろそろやばいな。だからすぐにカタをつけるか」アザゼルは
ありったけの魔力を玉に変え、「楽しかったぜ、金の龍帝!」アザゼル
は魔力玉を八幡に投げつける。

俺はここで終わりなのか、

そう覚悟して死を受け入れようとした瞬間

「八幡——！！」

悪魔の少女が俺を抱え魔力玉を交わし、アザゼルの前に飛ぶ

「お前は、、、」

薄れゆく意識の八幡に少女は、

「朱乃よ、貴方に助けられた朱乃！」

朱乃は八幡にそう伝えるとアザゼルは、

「お前さんは、リアスの所の女王じゃねえか。わざわざ戦場に何の用だ？」

「愛する者を助けてなにがいけないの？」

「そんなことをしたらお前さん、裏切り者になるぞ」

「私は裏切り者でいい、彼とそれで生きられるのなら」

朱乃は手に抱えている八幡を見る

「ならここで倒して文句なんかないよな」

アザゼルは剣を上げ朱乃達に振りかざす。そこにレインが現れる。

「そのの貴方八幡を後衛にいる回復班につれてって！」

「わかりました！」

朱乃は八幡を抱え後衛の方に飛び去って行く。

「今度はお嬢さんが勝負かな」

アザゼルはレインに言う。

「ええ、お手柔らかにね」

そこから、レインとアザゼルの勝負が始まる。

襲来中編

八幡を抱えて飛んでいる朱乃はシルヴィア達がいる後衛に飛んでいる。八幡は服が所々破れており破れてた所からは血が出ていた。朱乃は後八幡の傷が響かないように飛んでいく。五分くらい飛んでいると心の底から力が出てくる曲が聞こえてくる。

さっきの赤髪の彼女が言っていた人達かしら

朱乃は曲が聞こえる方に飛んでいく。すると周りから人が集まる。

「貴様！なんのようだ！」

「彼の救護をお願いします」

「それは八幡か」

「はい」

「ならこつちに」

アヴァロンの兵士達は朱乃をこちらへと誘導する。すると前には猫耳の黒に和風のドレスを見にまどつた人がいた。

「八幡！」

猫耳の彼女は八幡と呼んだ

「彼を助けてください」

「分かったにやん、何かおみやどこかしてみたことある気がするにやん」

「私も同じですわ」

「まあいいにやんその話は後今は八幡を助ける事に集中にやん」

猫耳の彼女八幡をそつと地面に下ろして詠唱を始める。朱乃は両手で助かる事を祈っている。すると八幡の周りに光りが少しずつ集まり八幡の体に入っていく。また一つまた一つと入って行った光は八幡の傷からは光り出し八幡の傷が無くなっていく。すると八幡は起き上がり周りを見渡す。手を握ったり開いたりして体が動くか確かめる。その動作が終わると立ち上がる。

「悪いな黒歌」

「別にいいにやん、でもまずは彼女にお礼しにや、後彼女の関係もー」

八幡は黒歌から朱乃に視線を移す。

昔助けた事は覚えているけどまさかこんな形で会うとはな少し気

「まずいすはい、正直

「ありがたいな朱乃」

「いえいえ私がしたかったからしたままですわ」

「でもどうしてこんな所にいたんだ」

「私は八幡を見かけた時城から出て助けに来ましたわ」

「城？どこから」

「敵の城です」

「すると周りの人達は朱乃を取り囲む」

「貴様！やはりスパイだな！」

「アヴァロンの兵士達は朱乃の喉元に剣を突きつける。」

「やめろ、朱乃はそんな事はしない」

「でも、」

「分かっている、でも朱乃も俺たちと一緒になんだだからその剣を納めてくれないか」

「分かった、八幡が言うのならそうなのであろう悪かった」

「いえ、気にしないでください」

「すると八幡は、」

「俺はまた戦いにいく皆はここを守ってくれよ」

「すると周りからおおー！と聞こえてくる。八幡は歌姫の二人に会いに行く。シルヴィアと渋凜である。二人とも最初は少し泣いていたが八幡が頭を撫でて慰めていた。すると二人は赤くなり下を向く。八幡が二人に何か言うと二人は「分かった」聞こえてきた。八幡は朱乃の所に戻ると朱乃に言う。」

「朱乃は後ろに下がっていてくれ」

「私も戦います！」

「ダメだ裏切り者になった朱乃は真っ先に襲われる」

「でも、」

「後ろの支援頼む」

「分かりましたわ、でも無理はしないように」

「ああ！」

八幡は禁手になりまた戦場に戻る。

～レインSIDE～

レインは双剣でアザゼルは偽物の神器を纏って戦っていた。

「お前さんの剣の技術おもしれな！」

「ありがとねおじさん」

「俺はまだおじさんじゃねえだけだな」

「ならおじさまの方がいい？」

「どっちもやなことだ！」

アザゼルは槍をレインに当てようとするがレインひらりと交わす。さつきからずつとこの繰り返しである。アザゼルはもう倒れてもおかしくないのに倒れていなかった。

「おじさんなんで倒れないの？」

「今が楽しくて倒れる事を忘れてるんだよ！」

「そう、でも八幡君をあんなにしたんだもんユルサナイから」

「おおー、怖い怖い可愛い顔が台無しだぞ」

「良かったねおじさん、おじさんから、ナンパおじさんにジヨブチェンジだよ」

「嫌なジヨブチェンジだなおい」

「八幡君が心配だからそろそろ終わらせる」

レインはアザゼルから離れる。

「何するか楽しみだが俺もそろそろ限界みたいだから力の全てを使おう！」

アザゼルは持っている槍に力を込めてこう言い放つ、

『死を穿てロンギヌスの槍！』

槍には邪気がほとばしっており誰しもが恐怖しそうな槍だった。レインは双剣を構えてこう言い放つ、

『サウザンドレイン！』

周りから水透明色の剣が沢山出てくる。それをロンギヌスの槍に向かって放つ。水透明の剣はロンギヌスの槍に飛んで行く。ロンギヌスの槍は水透明の剣に当たるが止まらなかった。それでもレインは放ち続ける。ロンギヌスの槍はレインの手前まで来る。レインは

死を覚悟していた。その瞬間黄金に輝く龍がロンギヌスの槍に力を加えてロンギヌスの槍の飛ぶ方向をそらす。

「八幡君！」

「待たせたな」

「また厄介なのがきたな」

「第二ラウンドと行こうか」

そう八幡言うのアザゼルは、

「やめとく、流石に俺が持たね」

「そうかならここから立ち去り神や悪魔のお偉いさんに言うんだなここに二度と来るなって」

「それは無理だな、なら俺はこれで」

アザゼルは片手を抑えながら飛んで行った。

「八幡君大丈夫なの」

「ああ、レインが助けてくれたおかげでな」

「私は八幡君のサポートだよ忘れないでね」

「すまん忘れてた」

「もう！」

レインと話していると敵の方から、「退散」と聞こえた。

???
SIDE

「あら四代魔王の一角はこんなに弱いことに驚いたは」

黒髪の彼女は地面に倒れている悪魔を見下す

「ユキノンそれは行っちゃダメだよー」

ピンクの髪の彼女は黒髪の彼女に笑いながら否定はする

「まあ、ほどほどにね雪乃ちゃん」

金髪の男性が黒髪の彼女に言う。

「誰に言ってるのかしら」

「まあ落ち着いて雪乃ちゃん」

黒髪のシヨートヘアの彼女が玉座の上に座りながら言う。すると地面に倒れていた悪魔が、

「くそー！貴様ら！」

「はい！喋らない」

黒髪のショートヘアの彼女はその悪魔の顔を蹴り飛ばす。頭は飛んでいき地面を転がる。

「まず魔王の一人を倒したから後三人」

「姉さん今回の戦争上手く言ったわね」

「驚きだよあんな簡単に引つかかるとはね」

玉座に座る彼女はニヤリと笑う

「まだまだ争ってもらわなくちゃね」

玉座から立ち上がり落ちている血がついた王冠を持ち頭に添える。

「キモ谷君はまだ見つからないのかしら姉さん」

「うーん、そうだねごめんね雪乃ちゃん」

「いいのよ別に姉さんが謝る事ではないは」

「そうだね、私達はこの悪魔界と天界そして墮天使たちを手に入れなきゃね、お姉さん頑張っちゃうぞー！」

黒髪のショートヘアの彼女は周りにいる人たちとともに出口を歩いてく。その広間には三百人の悪魔の死体が転がっていた。

「待っててね比企ヶ谷君、私達は貴方と会うのが楽しみだよ」

襲来後編

「サーゼクスSIDE」

サーゼクスは悪魔達に囲まれていた。

「何故退散なされたのですか!」

「あと少しで落とせそうだったのにどうして!」

悪魔達はサーゼクスに聞いたです

「その事はやむ得ないんだよ、さっき情報が入ってきて魔王の一角がやられたそうさ。我々が戦場に行ったすきで襲ったらしい」

サーゼクスは手を握りしめてそう言う。悪魔達はそれを聞いて慌ただしかった。「嘘だ、」彼の方がやられるなんて「サーゼクスは、襲撃してきた犯人は目星が付いている。奴らのほ

『インフェニティアベンジャー』

奴らが恐らくハデスをやったのだろう」

ハデスは我々と仲が良く、酒と一緒に飲んで愚痴を言い合ったりする仲が良かった友だった。いや親友に相応しいだろ、だが彼も魔王だからそう簡単に負ける訳はないと思っていたがまさか、やられて死んでしまったとは思わなかった。ハデスよ、俺は親友として仇を取るぞ。

そうおもっていると扉が思いつきり開かれる。

「どうゆう事サーゼクス!ハデスがやられるなんて!」

「ああ、陽乃か今犯人を探している所だ」

部屋に入ってきたのは魔王並みの力を持っている陽乃出会った。後ろには眷属の悪魔達がいる。一人は金髪、もう一人はピンク、もう一人は黒髪の子が扉の前で一例して入ってくる。ピンクの髪の子は慌てながらも同じ真似をして入ってくる。

「で、やった犯人は分かっただのよね?」

「目星はある『インフェニティアベンジャー』達だよ恐らく」

「またなの!奴ら私がないうちに!」

「怒るのはわかるが机に当たらないでくれ陽乃」

「ごめんついカットね」

陽乃は椅子に座りサーゼクスのお話を聞く。いつもの様な顔でサーゼクスの話を聞き真剣な顔で対応している。陽乃の眷属達は内心、少しサーゼクスに笑っていた事はサーゼクスやお偉い悪魔達は誰も知らない。

く八幡SIDEく

今は第二のアヴァロンの基地にいる。戦場で死んだアヴァロンの兵士はいなくて、助かった。アヴァロンの兵士達は避難してた人達と再会を果たし泣く者もいれば、喜び宴だー、と言う奴もいた。そのか何も何かの約束をしたのか告白までした奴もいた。周りからも口笛とかで「フユウ！フユウフユウ」と鳴らし告白のお膳立てしてるやたらもいた。周りの皆は笑いながら見ている。俺も見ながら傷の手当てをされながら。どうやら戦場に行く前に定番の死亡フラグみたいなことを言ってたみたいだ。告白はOKされた。また周りからも口笛とかでお膳立てをする。それを微笑ましく見ていた俺に朱乃が話しかけてきた。

「微笑ましいですねここは」

「まあな、ここはそう言うところだからな」

「傷の手当て手伝いますわ」

朱乃は包帯とガーゼを持ち俺の傷とかを手当てする。消毒液は少し染みて痛かった。

「終わりましたわ」

「ありがとうな」

「いえいえ」

朱乃は救急箱にガーゼと包帯をしまう。そこで少し下を見ていた。恐らく今までいた奴の事を気にしているみたいだった。

「気にしているのか？」

「ええ、少しだけ私の行為をどう思ってるか心配で。次会った時どうなるかと思っていました。」

すると八幡は、ガラスの球体を取り出す。その中にはリアス達がい

た。

「これは？」

「見たいものが見える奴だ、見てみるよ」

朱乃はガラスの球体の中を覗く。

↳リアスSIDE↳

「朱乃さんどうして」

イツセイは、泣きながらいう

「イツセイ君泣いてはダメだよ」

木馬が肩に手を置く

「朱乃さんどうしてですか」

アーシアと子猫は言う。

「皆んな落ち着いて」

リアスは皆を落ち着かせる

「でも部長！朱乃さんが、朱乃さんが、」

「泣かないのイツセイ！あの時のあの顔を見た時朱乃は恋する乙女の顔になっていたわ。私は朱乃が裏切ったのは少し嫌だったけど朱乃を止めたりしないわ。朱乃がそちらの道を選んだのだから、私には分かる朱乃と長くいたんですもの、朱乃には朱乃道があり一緒に辿るわけではない。ただ朱乃は違う所通っただけ、私達にも道がある。だから朱乃聞こえてなあかも知れないけど、また会って会話したりしてまた笑顔で会いましょう、でもイツセイは貰わ。私達は朱乃を送り出して笑顔で見送るわ、悲しくなんて無いのよ、、、悲しくなんて、、、」

リアス泣きながらも笑顔で言う

「朱乃さん！また色々教えて下さい！俺待ってます」

イツセイは泣きながらも笑顔になる。皆も泣きながらではあるが笑いながら窓を見て、

「朱乃！頑張りなさい」

リアスが言った瞬間、ガラスの球体はリアス達を移さなくなった。

↳八幡SIDE↳

朱乃の目から雫が一つ二つとこぼれ落ちていく。朱乃は泣いてい

た。彼らの暖かさがあり朱乃の顔はもう後悔はないと言う顔をしている。

「もう、後悔はないんだな」

「ええ、ありがとう八幡」

「いいんだよ別に、朱乃がそんな顔が嫌なだけだからな」

「捻くれますね相変わらず」

「うるせえ」

朱乃と会話をしていると金ピカ金髪の男が八幡の前に現れる。

「無事で会ったか八幡よ」

「援軍助かったよギルガメツシュ」

「あんな奴ら、王たる俺の友に手を出したのだそれ相当の報いを受けてもらわねばな」

ギルガメツシュ率いるバビロニアと言う組織は俺たちと同盟関係であり俺の数少ない友達である。

「あの時現れたらさ悪魔達がビビってたんだよな」

ギルガメツシュは天界や悪魔界に名前が知れ渡っている。それが急に現れたらビックリするよな

「俺に腰を抜かすなど当たり前のことよ。まあいい俺は帰るぞ八幡の安否が分かった事だからな」

「悪いな本当に」

「これ以上何も言うなではまたな」

ギルガメツシュはその場から消えたので会った。そして八幡は立ち上がり皆に聞こえるように、

「皆今日は死者も出さずによくやってくれた。宴をここで始めるのはいいが酔い潰れるなよー！」

皆が「ヒヤッハー」と声をあげ踊る奴、そのまま飲みまくってる奴、子供達は向こうのほうで走り回ったりして宴が始まった。厨房を除くとエミヤとレムとレインが頑張って料理を作っていた。

俺はこの感じが好きだ。誰しもが笑いあいながらこんな風にいられるのが。

『相棒お疲れ』

ああお疲れムート

『私も疲れたが相棒も疲れたろう』

まあ実のところは

『そろそろ相棒にアレを使えされるようにするから明日からキツイぞ』

ついに俺もいた至れたのか『覇龍』に

『多分もう大丈夫だろう』

キツイのはやだな俺

『まあそう言うな、では我は疲れたから寝る』

そうか了解

ムートの会話を終え片手に食材で、もう片方に飲み物を持ち宴の中に入っていく。